



# 紀念の牛塚

川口孫次郎

全体牛も馬も重荷を負つて他に戦鬪力の出さうにない場合に、馭者が其前に立つて率ゐて進むのは波等を率ゐて其遲滞を少くせんとするからのことであるが、一朝全く荷を負はず曳かざる場合とならば、馬を後にして先づ進むは馭者の常で餘程ハイカツたものでなくては後から馬について行かぬに反し、牛を後にして先きを進む馭者は何處を捜がしても決してない、殊に日本産の牛に於て然りである。「牛には心許されぬ」といふ幾多の苦がい経験があるからである。一々挙げ來つた例によればドウしても牛はあまり人望のない方の氣の毒なものである。

何は扱ふき、牛は人相が……オット……牛相が

よくない。心して観たまへ、動物の中で第一等の凄い顔付をして居るものは此地球上では先づ此牛君であらう。顔付を見て感情上から愛憎をすることは匹夫匹婦の心事であつて國士淑女のいたく蔑むところではあるが、正直なところをいへば顔付がねちけてくすんで隠険に見ゆるとドウしても光明な快活な相貌をして居るものほどに他人に快感を起さぬことは確かな事實であり、又隠れたるより顯はるゝはなく微より明かなるはなしとやら内にネチけて歪んで居つては如何に外形をつくらんとしても矢張どこにか相貌の上に現はるゝものであるから、牛君なども今少しあつさりするやうに修養するがよからんかと思ふ。

併し、天地萬物を造つた神が、否天地萬物が自づと出來た其自然が餘程匙加減を善くして萬物に依估の憾みのないようにして居る。上述の例丈では一方ならず不利な不名譽な牛君なども浮世での沙汰は兎もあれ角もあれ、大丈夫の事、棺を蓋ふて後定まるとやら、彼の献身した後の効用といつたら恐らく家畜中の随一であらう。其肉皮骨脂角

毛、極言すれば爪から先きも不用なものがない。知らないもので始めて知つた者は驚かざるを得ない位である、但し此方面の詳しいことは博物の専門家が喋々するところだから吾輩は之に立入ることを屑しとせないのである。唯茲に明に斷言出来ることは牛に如何なる缺點ありとも右の一條で一切を償ひ返して尙ほ遙に餘剰がある丈の効用を生になして居ることである。

況して牛君は決して右に述べて來たばかりの冷血な不作法一偏のものでない。牛君の意氣惡げな人の虐待に由來すること馬君のそれ以上であるからである論より證據、古來畫題に牧童吹笛とわつて、無心の吹笛の童を載せ長閑に牧場より歸るものは彼牛君ではないか。更に我輩自身の實驗に據つても牛君の色彩に關する趣味心を窺ふことが出來た。今から五六年前地方の某中學校の増築工事中、石材運搬の荷車を挽いて來た大きな牡牛の一頭が其牛逐の休憩中に、ドウしたものか荷車との聯絡を外つて此方の中學生等が夢中になつて庭球の競技をやつて居るクラウンドの方向にノッ

リ／＼と所謂牛歩を轉じて來始めた。何れに來るか此方注目して居ると、白組の方には向かないで、紅の帽子を被つた選手等の一群の居並べる方向を指し大きな首を長閑にゆりながら徐ろに紅の選手たるべく出馬否出牛といふことに愈きまつた。今迄競技に夢中であつた紅の選手等も此思ひ懸けない唐突の來援に、頗る狼狽して大騒ぎをやつてヤレ牛が攻撃して來たなどと叫んだものさへあつたことがあつた。併して當時事情を局外から靜觀して居つた吾輩には牛が無かし失望したらうと思ふた。何も惡戯をやり來たのではない唯彼の美しいと思つたものにおこがれて來たばかりであつたのである。實際、牛は色彩については亞弗利加内地の野蠻人よりは勝つた辨識力を具へて居る、少くとも彼等は赤色を大賛成である、赤でなくては紫色が第二の賛成色である。無神經のやうに人から蔑まれて居る彼等でも此等赤なり紅なり紫なりの装を身につけてもらへば彼等のうれしげな容子が假令顔面の筋肉の動きに現れざるにせよ、其行動の全体にあり／＼と見ゆるのである

随分しはらしいところがあるのである。

南海鐵道の終點から、南東十五里、龍神街道に

沿うた山間に牛の爲に建てられた一基の石碑があ

る。由來を聞けばその昔世界隈の猫の類はどの山

田を耕さん爲に村の或一家に當歳の仔牛を運れた

親牛を飼つて居つた。親心といふものは又一種時

別のものと見えて彼の無愛想な顔付をしながらも

憤を愛することは非常なものであつた、併し之は

勿論所謂破憤の愛であらうと誰しも思つて居た

が、氣の毒にも或日それが左様な苟且ならぬ眞個

の愛であるといふことが證據立てられた。

事の起りは如月のさし入りの或朝まだき、牛飼の

下部は已れの室から稍々離れた例の牛舎に秣をや

りに行つた。門が一本外づれて舎内はいたく取亂

して居る。片隅に憤が小さくなつて縮まつて居る。

之は大變と早速其由主人に傳へて諸共に調べてみ

ると、舎外に親牛の蹂躪した蹄の痕の間にところ

く、異様の足跡がある。血戰の紀念が點々として

敷へらるゝ。主人は事能容易ならずと見てとつて

兎も角も裝藥したる獵銃三挺を取出し心利きだ

る若者二名を伴ひ即刻親牛の行衛探索に取かかつ

た。どうも非常の混戦をやつたものと見えて其跡

を傳つて行けば野を経て山に入り林を抜けて復た

元の處に返る。之ではならぬと更に逆に詮索して

つたつてみると途中の或谷川を飛び越した跡があ

る、茲に至れば追つたのではない最早追はれたに

相違ない。血闘の益激しくなつた紀念のしるしが

彌々歴然として來た。主人始め二人の若者共もい

たく牛の爲に憐れを催し一刻も早くと尋ねゝた

其結果更に十數丁許彼方の絶壁の下にやつと見出

した。ホット少しく安堵したのは牛が頭を下げて

起つて居つたのを認めた一瞬であつた。馳け寄つ

て見ると、彼は全く戰鬥体形で畢生の努力を單め

て四肢を踏張つて居る。全身完膚なく惡戰苦闘の

歴々たる紀念をといふめ、鼓動は激浪の如くに其腹

部に波だつて居る。全く奮闘眞最中の體勢である

更に三人に頭から冷水をかぶせたのは其親牛の角

にかゝつて絶壁の面に壓付けられて居る當の敵で

あつた。敵とは果して何物ぞ、猪か、あらず、熊

か、あらず、又鹿にも非ず、なく日本内地に於け

る山の主なる狼であつた。三人は爲に覺えず戦慄したが、流石に主人は早速我に歸り、身捕へして銃口を擬して近寄つたが、敵は壓迫せられて早や絶息して居る様子、されど牛は之を知る由もなく唯もう夢中で押し付けて居た。憐むべきは彼牛の胸中にも此際唯人間の來援を待つ外に一切已に勝利なきことを自からも能く覺知して居つた事である。それが氣がついて主人は若者共に念の爲に狼に留めを刺さして扱自身は牛に一層近寄つて、『オー能く戦つた、おれが來たぞ、安心せよ、憤も無事だぞ』と吾知らず心の底から慰めの一聲を洩した。之が麗はしい人情の流露、牛にも定めて徹したに相違ない。但し主人としてはまだ十分でなかつた。兎に角主人の意が彼に通じたと同時に今の今まで激しかつた鼓動がビツタリ止つて、力一ぱいに踏張つて居つた體勢がグラリと崩れてバツタリと僵れて、早や瞑目して居る。呼べと勵ませど何の反應もなく見る／＼うちに冷却して行くのであつた、一人の若者は機轉を利かして馳け返つて宅に急報しやうとせる途中、今朝來全部落僅十

戸の者共盡く業を廢して彼家の爲に彼方此方と搜索の途に出懸けて來た其一部と出遇つたので、報が忽ち村中に傳はつて斯かる山里の美風ともいふべき一村一家の如く我も／＼と心付きのまゝに薬を携えて走せ寄つたが、併し彼牛には最早藥はいふまでもなく溪川から掬んで來た清冽な水も通らない。唯微温は辛うじて残つて居るばかりであつた。そこを年の頃八十にもあまれる鶴髪の一老異人が通つた。全く見知らぬ人だが村人の愁傷の態を見て徐ろに歩を此方に轉じて、いざ診て遣さんといふに、願ふてもなき幸と有りし次第を手短かに語り告ぐるを聽きながら瞬きもせず彼牛をまもりつゝ、頓かて徐かに、されど明晰に、並み居る主人若者及村の純朴の人々の心の底に徹する力ある調子にて『心臓の破裂なり、今は全く救済の途なし、一瞬の呼吸に惜しきこととしてけり』と斷言し、いざ然らばと立去らむとするを、憾むにはわらねど辛き世の濁にまだ虐げられぬ純粹素朴の主も村人も、亡くなりし牛の名残り惜しさに、男泣きに覺えず眼を拭つたその有様をチラ

と認めて、流石に寒巖の如く枯木の如き鶴仙も、物静にふりかいたりみて人々を慰め顔に、『傷む勿れ、心の破裂はうれしさの感激に基きしものぞ。我日の本にて生きとし生する禽獸の何れか彼狼に敵するを得べき。さるに其牛の克ち得たりしは、いとしかかりし我子故に迷ふ親心の恐ろしくも我身を投げ棄て、防ぎ戦ひしに運よくも萬が一の勝を制したるものなれ。そこ許等の早速の救護は如何ばかりか身に泌みてうれしかりしならむ。一時に胸の塞さがりて血管の破裂せしも全くその故ぞ。逝さしもの惜むは世の人心ならむ。しかはあれども迷の多き世に子故に迷ふてふ世にも尊ぶと悟りを得たりし其牛に何の憾か遺りあるべき。げに其牛こそ此郷の誇りなれ。よしなに後事を營みやり給へかし。之も抑其處許等の善根といふものぞと。』語り終りて、彼老異人は白馬嵐の肌を透す寒さにも悠然として彼方をさして苦の細道たりつゝ、影は早や蒼蒼として晝尙は闇さ杉の木立にかくれ終はんぬ。

斯くてあるべきにあらねば、異人の教のまゝに一

家一村の心の底より穢がれし暖かき同情の下に彼の慈愛深く勇氣に富みし親牛は静けく平らけく、茲に掲げし紀念の牛塚の碑の下に永眠することになつたのであるとの言ひ傳である。そして、道祖神の松が假令薪に切られ四辻の石佛がよし石橋にせらるゝ世が來ても、此牛塚ばかりはドンな公力を以て迫まられても動かすことが厭だと、今でも此郷人にははれて居る。これでも尙は牛は凡て冷酷無情無神經だといふ人があらふか。

話が長くなるから茲に一段落をつけてかくが、唯彼老異人の劈頭の一語に『一瞬の呼吸に惜しきこととしてけりとありしに單純極まる村人の一群の中にも有繋に心づきし一人の若者があつて早速彼異人を尋ねべく後を追うて遂に十有五ヶ年此郷に歸り來なかつたといふ一條、何れ機會を見て語りもいたさむ。

